

祖堂集第卷十九

江西下卷第六曹溪五代法孫

香巖和尚、瀉山に嗣ぐ、登州に在り。師、諱は智閑、未だ実録を見ず。時に云つ、青州の人なりと。身は方に七尺、博聞利弁、才學当る無し。瀉山の衆中に在りし時、玄猷を撃論す。時に禅匠と称せらる。前後数数扣撃す。瀉山の問難するに对答は流るるが如し。瀉山は深く其の浮学にして未だ根本に達せざるを知る。而して未だ其の詞弁を制する能わず。後因みに一朝、瀉山の問うて曰く、汝が従前の所有る学解、眼耳を以て他人より見聞せし及び経卷冊子上に記得し来れる者は、吾れは汝に問わず。汝の、初めて父母の胞胎中より出でて、未だ東西を識らざる時の本分の事、汝試みに一句を道い來たれ。吾れ汝を記せんと要す。師、茲れより对無し。低頭、良久し、更に数言を進むるも、瀉山は皆な之を納めず。遂に為に道わんことを請う。瀉山云く、吾れ道うは当たらず。汝、自ら道い得れば是れ汝が眼目なり。師は遂に堂中に歸し、遍く冊子を検するも亦た一言の対う可き無し。遂に一時に之を燼す。有る学人、近前して取らんことを乞う。師云く、我れ一生來、他に帶累せらる、汝は更に之を要して奚をか為す。並びに之を与えず、一時に燼せり。師曰く、此の生は佛法を学せず。余は生まれてより來た、当たる有る無しと謂いしも、今日、瀉山に一撲せられて淨尽す。且らく一个の長に粥飯を行する僧と作りて一生を過さん。遂に瀉山を礼辞し、両涙して門を出づ。因りて香巖山の忠国師の遺跡に到り、棲心憩泊し、草木を併除して悶を散ず。因みに瓦礫を擊擲する次で失笑し、因りて大悟す。乃ち偈を作りて曰く、一捏して所知を忘じ、更にみずから修持せず。処処に蹤跡無く、声色の外に威儀す。十方の達道の者は、咸な言う上上の機と。

香巖和尚は瀉山に嗣ぎ、登州におられた。師は智閑と諱するが、その實際の記録は見たことがない。青州の人とも云う。身長は七尺に達し、博聞で弁がたち、その才能と学識は抜きんでていた。瀉山の一門の中にあつた時、深い道について激しく議論し、禅匠と称された。その頃しばしば人を屈服させ、瀉山の問難にもその答えは流れる如くであつた。瀉山はそれが浅薄な学識にすぎず根本には達していないことを熟知していたが、香巖の弁舌を制することが出来なかつた。ある朝、瀉山が質問して云う、お前の今のあらゆる学解、つまり眼や耳で他人から見聞してきたこと、そついったことは私はお前に問わない。お前が父母から生まれ出た

ばかりで、何も知らない時の本分の事について、お前は試みに一句云ってみなさい。私はお前を証明しよう。師はこれに答えること無く、頭をたれてしばらくしてから、あらためていくつかの答をのべたが、瀧山はどれも受けつけなかった。そこで瀧山に云ってくれるように頼んだ。瀧山が云う、私が云ったのではだめだ。お前が自分で云えたならば、それがお前の眼目となるのである。と。師はそこで堂中に歸り、あらゆる本を点検したが、答になるようなことは一言も無かった。そこでこれらを一度に燃やそうとしたところ、ある字人が近づいて来て欲しかった。師は、私は生まれてこのかたこれのまき添えをくって来た。それなのにお前はこれを求めてどつしよつというのか、と云って、まったく与えず、一時に燃やしてしまった。師が云う、今生では仏法を学ぶまい。私は生まれてから今まで、敵う者はないと思って来たけれど、今日瀧山にひと投げされて素っからかんになってしまった。しばらく一介の乞食坊主になって一生を過ごそうと思つ、と。すぐに瀧山に別れのあいさつをして涙を流しながら門を出た。それで香巖山の慧忠国師の遺跡に到着し、心をやすめて休息し、草木を掃除してうさをはらしていた。たまたま瓦礫を打って、思わず笑いを洩らし、それによつて大悟した。そこで偈を作つて云う、

ひと打ちで知識を忘れてしまった。もはや修め保つことはない。いたるところあとかたも無い、声色外の威儀。十方の達道の者は、こぞつて上上の機だと言つ。

・ 擊擲瓦礫 原文に依る限り、音の入り込む余地はない。伝灯録では「以瓦礫擊竹作声」とする。

便ち罷めて室に歸り、香を焚いて、威儀を具し、五体投地して遙に瀧山を礼し、讃じて曰く、眞の善知識、大慈悲を具し、迷品を拔濟す。当時若し我が為に道却せば、則ち今日の事は無かりしならん。便ち瀧山に上りて具さに前事を陳べ、并に發明の偈子を呈似す。和尚は便ち上堂し、堂維那をして大衆に呈似せしむ。大衆は惣に賀す。唯だ仰山の外に出でて未だ歸らざる有るのみ。仰山の歸りて後、瀧山は仰山に向いて前件の因縁を説けり。兼ねて偈子を把りて仰山に見似す。仰山は見了りて賀すること一切して後、和尚に向かつて説く、則ち与摩に發明すると雖も、和尚は還た他を験得せしや。瀧山云く、他を験せず。仰山は便ち香巖の処に去きて、賀

喜すること一切して後、便ち問う、前頭は則ち是くの如きの次第有り了る。此の如しと然いえど雖も衆人の疑を息めず。作そもたん摩生か疑う響。將に謂えり、預め造りしならんかと。師兄は已に是れ發明し了れり。別にはれ氣道に造りて道いもち来たれ。香嚴は便ち偈を造りて對えて曰く、去年は未だ是れ貧ならず、今年は始めて是れ貧なり。去年は卓錫の地なし、今年は錫もまた無し。仰山云く、師兄は只だ如来禅有るを知りのみにして、且く祖師禅有るを知らず。

・前頭 頭は軽い副詞。先ほど、の意。

・氣道 四一八五頁に「便得這個氣道」とある。一息に、肉声で、という程の意味。

・去年未云々 寒山詩「昔時可可貧、今朝最貧凍。作事不諧和、触途成倥傯。」

・師兄在知有如来禅 在を只に改める。

師、僧に問う、如し人の高樹上に在り、口に樹枝を嚼み、脚は樹を踏まず、手は枝を攀じず、下に人の有りて問う、如何なるか是れ西來の意、と。又た伊かれに向かつて道うべし。若し道はば又た撲殺せられ、道はざれば他の問かれに違う。汝、此の時、作摩生か他に指して、自ら虎頭に喪身失命するを免れん。招上座、返つて問う、樹に上る時は則ち問はず、未だ樹に上らざる時は作摩生。師、笑つこと嘘嘘たり。

問う、如何なるか是れ現在に抛りて学す。師は扇子を以て旋轉して云く、見るや、見るや。

・扇子 うちわ。

問う、如何なるか是れ無表戒。云く、閻梨の還俗するを待ちて則ち你が為に説かん。

問う、如何なるか是れ声色外相見の一句。云く、某甲の未だ香嚴に住せざる時、且らく道え什摩の処に在りしか。(云く)与摩の時は亦た敢えて在りと道わず。(師)云く、幻人の心心所念の法の如し。

問う、如何なるか是れ聲前の一句。師云く、大徳未だ問わざる時則ち答えん。進んで曰く、即今の時如何ん。云く、即今の時間なり。

問う、声前の一句とはどのようなものでしょうか。師が云う、あなたが問わない時に答えよう。曰く、今はどうですか。師が云う、今は問つておる。

問う、如何なるか是れ直に根源を截る佛の所印。師、杖を把つて抛下し、撮手して去る。

問う、ずばり根源を切り開くのが佛の印可する所とはどういふことでしょうか。師は杖をほつり出して撮手して去る。

・撮手 撮は撒の間違いか。

・直截根源佛所印 證道歌の語。

古人の跡を指す頌に曰く、古人の語、語中に骨あり。雲の秋月に映ずるが如く、光明は時として出没す。句裏に隠れて、當當ならず、人は玄に會して、暗に商量す。唯だ自ら肯えば、意は傷われず、一物に似ること、相い妨げず。

・映 映に同じ。見えかくれること。

・不當當 卷十鏡清の伝に「又一日、雪峯告衆云、當當密密底。師使出對云、什摩當當密密底。雪峯從卧床騰身起云、道什摩。師便抽身退立」。當當は堂堂に同じ。

師、樂普と同行し、相い別れんと欲得せし時、樂普云く、同行、什摩の處にか去く。師云く、東京に去く。普曰く、去きて什摩をか作す。師云く、十字路頭に卓庵し去る。普曰く、卓庵して什摩をか作す。師云く、人の為めにす。普曰く、作摩生か人の為めにする。師便ち佛子を拳起す。普曰く、佛子を拳起して作摩生か人の為めにする。師便ち佛子を抛下す。普云く、荒處すら猶お過ぐるなり。淨地に什摩と為てか却つて人を迷わす。師云く、伊を恠しんで什摩をか作す。

師は樂普と同行していたが、別れようとした時樂普が云つた。ご同行、どこへ行く。師が云つ、東京へ行く。樂普が云つ、行つてどうするんだ。師が云つ、十字街頭に庵を立てる。樂普が云つ、庵を立ててどうするんだ。師が云つ、人のためにする。樂普が云つ、どう人のためにするんだ。師は佛子を拳げる。樂普が云つ、佛子を拳げてどう人のためにするんだ。師は佛子をほおりする。樂普が云つ、荒處でさえ過ぎて行くのだ。それなのにどうして淨地で人を迷わすのだ。師が云つ、かれをとがめてどうしようというのだ。

勵學吟、満口の語處として説く無し。明明に向かつて道うも人は決せず、急に力を著けて咬嚼するに勤めよ。無常到来するとき救不徹ならん。日裏に話し、暗に嗟すること切なり、快く古錐を磨して淨く挑掲せよ。理盡きて覺り、自ら護持す。此の生の事、吾れ説かず、玄旨は他の古老の吟に求む。學禪は須く心影を窮めて絶せしめよ。

・快磨古錐淨挑掲 淨の字、可怪しい。

・禪學 禪宗の学徒、六四頁にも見える。

師、宗教の接物を誠むる頃に曰く、三句語、人の玄を究め、面目を迅つて示すこと豁然。兩路を開いて機縁を備うるに、投じて遇わざれば説くこと多年ならん。

洞山、僧に問う、什摩の處をか離れ來たる。對えて云く、香巖を離れ來たる。山云く、什摩の佛法の因縁有りや。對えて云く、佛法の因縁は即ち多きも、只だ是れ三等の照を説くことを愛す。山云く、拳し看よ。學人拳して云く、恒照、常照、本来照。洞山云く、人有つて此の三等の照を問ひしや。對えて云く、有り。山云く、作摩生か問ひし。對えて云く、作摩生か是れ恒照。又た常照を問ひり。山云く、好き問處は問わず。僧問う、請う、師、この問頭を垂れよ。洞山云く、問は則ち有るも拈出するを用いず、作摩に縁が故ぞ。闍梨千郷万里にして來たり、乍めて者裏に到れり、且く歇息せよ。

其の僧纔かにこの問頭を得るや。眼より涙落ちたり。洞山云く、哭きて作摩をか作す。對えて云く、和尚に啓す、未代の後生、伏して和尚の方便を垂るることを蒙り、這今の氣道を得たり。一つには則ち喜び自ら勝えず、二つには則ち和尚が法席を戀う、所以に与摩に涙下るなり。洞山云く、唐三藏、又た作摩生か唐國より西天に去くこと十万八千里なる。這今の佛法因縁の為に身命を惜まず。如許多の嶮難を過ぎ得たり。所以に道う、五天猶お未だ到らざるに、両眼涙先ず枯る、と。是れ此れより香巖は千郷万里なりと雖も佛法因縁の爲めこの什摩をか怕れんや。

其の僧下山し、香巖に却歸し從容として二日を得たりしとき、師、帽子を戴きて上堂せり。其の僧便ち出で來たつて問う、承るらく師に恒照、常照、本来照を言つ有りと。三等の照は則ち問わず。不照の時喚んで什摩とか作す。師便ち帽子を卸下して衆前に抛放せり。

其の僧、洞山に却歸して具さに前事を陳せり。洞山却つて低頭して後に云く、實に与摩なりきや。對えて云く、實に与摩なりき。洞山云く、實に与摩なりしかば、頭を斫るも也た罪過無し。

其の僧、香巖に却歸して具さに前事を陳せり。師、牀を下り、洞山に向かつて合掌して云く、新豐和尚は是れ作家なり。

洞山が僧に問う、どこから來たか。答えて云う、香巖から來ました。洞山が云う、どんな仏法の因縁があるか。答えて云う、仏法の因縁は多くありますが、三等の照を説くことが好きです。洞山が云う、話してみなさい。學人が拳して云う、恒照、常照、本来照です。洞山が云う、この三等の照のことを問うたものがいたか。答えて云う、はい。洞山が云う、どう問うた。答えて云う、

恒照とは何でしょうか、と。また常照のことも問いました。洞山が云う、せつかくの問は問わないのだな。僧が云う、どうか和尚、問をさずけて下さい。洞山が云う、問はあるが、とり出す必要はない。何故かといえは、お前さんは千郷万里はるるところに来たばかりだ。まあお休み。

その僧は問を得たとたん眼から涙がこぼれ落ちた。洞山が云う、泣いてどつしよつというのだ。答えて云う、申し上げます。未代の後生のこのわたしは、もったいなくも和尚の方便をこつむり息をふき返した思いです。一つには喜びに堪えず、二つには和尚の法席がなつかしく、それでこのように涙がこぼれるのです。洞山が云う、唐三蔵はいたいどつして唐の国から西へ十万八千里も行ったのだ。この仏法の因縁のために身命を惜しまず、あれほど多くの嶮難を切りぬけたのだ。だから五天猶お未だ到らざるに、両眼涙先ず枯ると云うのだ。ここから香巖山は千郷万里のはるかだけでも、仏法因縁のために何を怕れると云うのだ。

その僧は山を下りて香巖山に歸り、なにとはなしに二日過ぎたところ、師が帽子をかぶって上堂した。その僧は出て来て問う、つけたまわれれば、師は、恒照、常照、本来照を言っておられるそつです。三等の照のことは問いません。不照の時どつ呼びますか。師は帽子をおろして大衆の前にほおりなげた。

その僧は洞山にもどり、具さに出来事をのべた。すると洞山は頭を低くたれてのち云った、實際にそのようであったか。答えて云う、實際にそのようでした。洞山が云う、もしほんとうにそつであったのならば首を取っても罪にはならん。

その僧は今度は香巖山に歸つて具さに出来事をのべた。師は牀を下り、洞山に向かって合掌して云った、新豊和尚は作家である。

・ 恒照 人天眼目四では寂照とする。

・ 得這个気道 気道は息のこと。八三頁にも見える。蘇生したことを云うのであつた。

・ 唐三蔵 玄奘のこと。

・ 五天猶未到云云 未だ出據を検索し得ず。

・ 卸下帽子 原文は却下帽子。首を切らせる用意。

・低頭、ぐさりときて参ったところ。

・斫頭也無罪過 香敵の頭くさ。とてもわしにはかなわんというゝ参ったゝの表明。

最後頌に曰く、一語有りて規矩を全つす、思量を休めよ、自ら許さざれ。路に同道の人に逢わば、眉を揚ぐるも来處を省す。踏不著ならば疑慮多く、却つて思量して伴侶を帯ぶ。一生参學するも事成る無く、慇懃に梅檀樹を抱得す。

最後頌に云う、すべてをまかなつ一語がある、思量するなかれ、自ら許さざれ。路に同道の人に会うときは、眉動かしたただけも来處を見てとる。しつかりふるまえていなければ疑慮多く、あるつことか思量してつれあいにつきまとわれる。一生参學しても事成らず、こつていねいに梅檀樹を抱くことになる。

常在頌、管帯歴歴として諸辺寧息し、平常の見聞、榛棘に入らず。四威儀中、淨潔たること析析たり。機感じて相い殺すれば、一時に抛擲す。嘿處に縁に對して、聲前に跡を踏わす。同道相い知ること、勢力を勞せず。

・管帯「葛藤語箋」、忠曰、管者意領也、帯者如帶不離身也。管帯、著意不忘也。

修行頌、天寒きときは宜しく日に曝すべく、堂に歸る一食の傾。未だ生ぜざる時を思著し、宜然として他の清きに任す。只摩に尋ぬる時、明鏡は明鏡に非ず。獨坐して靈源を覺し、行く時も也た只寧かくのこし。

・曝日 ひなたぼっ。

・一食傾 一食頃に同じ。

・宜然 二字で宜の意味か。不明。

・只摩尋時 原文に乱れあり。

鄭郎中問頌、既に人の解く無く、又た人の縛する無し。此の路岐を出でて、何れの城郭にか入らん。

鄭郎中の質問の頌にいう、解く人もなければ縛る人もない。ではこの路を出てどこのお城に入るといのですか。

師、頌もて答うらく、語中に跡を埋め、聲前に容を露わす。即時に妙會すれば、古人と道同じ。嚮應機勸すれば、自他の宗無し。訶して起たしめ駭跨せしめ、嘖迅して龍と成らしむ。

師は頌で答えていう、語中にかげをひそめて声前に姿を現す。即時にめでたくわかれば古人と同道だ。嚮應機勸すれば自も他もない。訶してふるい立たせ、奮迅して龍とならしめよ。

・語中埋跡 指古人跡頌参照。

・嚮應機勸 嚮應は響応に同じ。機勸がよくわからない。

鄭郎中又た問う、来たるに他の轍跡無く、去るときは是れ我が途に非ず。獼猴を併逐し盡くして、山川の境在りや無しや。

鄭郎中がまた問う、来るときわたちの跡もなく、行くときわたしにみちはない。ことごとく猿を追っばらったとき、山川という境はあるのでしょうか。

大師、撥機頌を以て答うらく、語裏に筋骨を埋すむれば、音聲は道容に染む。即時に纒に妙會すれば、手を拍って乖龍を趁わん。

大師は撥機頌で答えて云う、語裏に筋骨を埋すめていれば、音声も道のかたちに染まる。即時にめでたくわたったとたん、ポンと手をつっただけで乖龍を追いはらう。

・語裏埋筋骨 指古人跡頌参照。

・乖龍 人の身中に住むという怪物。

清思頌に曰く、盡日虚堂に坐し、静思して参詳することを絶つ。更に廻顧するの意無きも、争でか肯えて平常を置かん。

清思の頌に云つ、ひねもす虚堂に坐し、静思して参詳を絶つ。もつふりかえる気はないが、平常をさしおくつもりもない。

談玄頌に曰く、的的として兼帯無く、獨運何にか依頼せん。路に達道の人に逢わば、語嘿を將つて對すること莫れ。

的的としてつれあうものなく、独りゆくもの何にたよろうか。路に達道の人に逢つたら、語嘿で應對してはならない。

・路達達道人莫將語嘿對 司空山本淨に「忽逢修道人、第一莫向道」(伝灯録五)の語がある。

學人に与つる玄機頌に曰く、妙旨は迅速にして、言説は来たること遅し。纔かに語に随つて會せば、神機を迷却す。揚眉して問いに當り、對面して熙怡す。是れ何の境界なるか、同道にして方はじめ知る。

・揚眉當問 まゆうこかして問にこたえる。

渾湍語頌に曰く、一束の茆、草六分、庵をおほい得て子門無し。葳頭の人、入去却し、頭を轉じ来たつて渾湍を語る。

渾湍語の頌に云つ、一束のかや、わらが六分、いおりを貰いてくぐり戸なし。頭すつばかりかくした人が入っていつて、顔ふりむけて言つ、渾湍の語。

・渾湍 福先招慶の伝に「又上堂、于時云、大家識取混嶮、莫識取劈破。笠土大仙心、東西密相付、是混嶮、是劈破。時有人問、承師有言、大家識取混嶮、莫識取劈破。如何是混嶮。師良久。問、如何是劈破底、師云、只這个是。」(三了二六頁)兀然たる一枚岩の形容。

師、衆の為に曰く、此の世界は日月短促なり。則ち須く急急底の事、了却し去るべし。如許かくばかり多くの不如意の事を平治して、直に須く地の如くに相いで安然不動なるべし。一切殊勝の境、随つて轉ぜざれ。只摩に尋常にして造作することを用いざれ。獨脱現前すれば伴侶を帯びず。皎然たり秋月、内外を明らかに通透す。寸陰を尅念して直に須く此の生に了却すべし。今生了せざれば阿誰か替代せん。大徳、頭は白く、齒は黄ばみ、耳は聾して眼は暗むを待つこと莫れ。無常到来するとき悔ゆるも當はた何ぞ及ばん。

大徳、身上は是れ他の衣、堂裏は是れ他の食、燈油火炭、床榻どま具、仕方信心の供須なり。何の道業も將もつて消受せん。一念、跡盡くさざれば个个是れ債負なり。特達の丈夫は、氣志堅固にして、心は断繩の如し。三界の因果を休し去る。現時の富貴貧窮を盡くして、縦ままだに貧愛を恣ままして有漏を織造せん。今日に至りては應ま當に足ることを知るべし。過去の諸佛還た凡夫中より修持し去れり。天生の聖人無し。大徳、本より婦中を離れ、父母を抛却して出家して什摩の事の為にするや。因循なること莫れ。猶預して虚しく光陰を度ること莫れ。古人道う、語を参玄の人に寄す、光陰虚しく度ること莫れ、と。百丈云く、努力して一生に須く了却すべし。誰か能く累劫に諸殃を受けん、と。

師は衆にいう、この世界は月日は短く切迫している。急急底の事にけりをつけねばならない。かくばかり多くの不如意の事を平治して、大地のように安然不動でなければならぬ。どんな殊勝な境界もついてまわってはならない。ただいつものようにして造作する必要はない。獨脱現前すればつれあうものもない。あたかも皎然たる秋の月のように、内外を明らかに透徹する。寸陰に思いをひそめてこの生涯でけりをつけねばならぬ。この生涯でけりをつけねば、誰が代わりに死んでくれようか。大徳、頭が白くなり、齒は黄ばみ、耳はとおくなり、眼はかすむのを待つてはならない。死がおとずれたとき悔いてもおつつかない。

大徳、身にまとうのは人様の衣だ。食堂にあるのは人様の飯だ。灯油火炭、床榻具、十方信者の供養である。どんな道業があるとして受けているのか。一念も跡を盡くさねばひとつひとつが負目である。特達の丈夫は志し堅固で、心は断たれた繩のようである。三界の因果んかたをつけている。現在の富貴貧窮、苦楽などのことを絶ち切らなければ、未来永劫、貧愛をほしいままにし

て有漏を造つて行くことだろう。今日わたしの法席にいたつたからには足ることを知らねばならない。過去の諸仏もまた凡夫のところから修行したのだ。生まれつきの聖人というものはいないのである。大徳、もと婦中を離れ、父母をすてて出家して、何事のためにしようというのだ。因循であつてはならない。猶預してむなく月日をおくつてはならない。古人は云つてゐる、語を参玄の人に寄す、光陰虚しく度ること莫れ、と。百文和尚は云つてゐる、努力して一生に須く了却すべし。誰か能く累劫に諸殃を受けん、と。

・特達丈夫から應當知足まで読みにくい。一応右のように意識しておく。

・心如断縄 どうつて警えなのか見当がつかない。

・婦中 婦の字不明。あるいは郷中のあやまりか。

・古人道云々 参同契の語。

古を明らむるの頌に曰く、古人の骨、靈異多し。賢き子孫、密に安置す。此の一門に孝の義を成す。人未だ達せずして差池すると莫れ。須く志固くして狐疑を遣るべし。安静なることを得て傾危せざれ。向かえば即ち遠くして、求むれば即ち離る。取れば即ち失い、急げば即ち遅る。計校無ければ覺知を忘す。濁流の識、今古も偽なり。一刹那に通変異なる。嵯峨たる山、石火起こり、内裏に發して巖窟を焚く。遮欄無くして海底を焼く。法網疎にして靈焰細なり、六月に卧し被衣を去る、盖不得にして僻偽無し。達道人、祖意を唱つ。我が師宗、古来諱む。唯だ此の人のみ善く安置す。法財に足りて慙愧を具す。虚しく施さず、用處諦なり。人有つて問つても呵氣する小し。更に尋ね来たれば米賈しと説く。

・差池 いきちがう。

崔太夫に与えて玄を暢ぶるの頌に曰く、達人、隱蹟多く、定めて形儀を露わにせず。語下に跡を遺さず、密密に潜かに護持す。容

を動かして古路を揚ぐ、明妙にして乃ち方めて知る。物に應じて但だ施設するのみ、道つこと莫れ不思議なりと。

崔太夫に宛てて玄をのべた頌に云う、達人には隠蹟が多く、しかと姿をあらわにすることはない。ものを云つても痕跡をとどめず、密密にひそかに護持している。相貌を動かして古路を宣揚する仕方は明妙のものであつてはじめてわかる。それも相手に応じてかりそめにしただけのこと、云つてくれるな、不思議だなどと。

寶明頌に曰く、思い清き人は慮ること少く、風規自然に足る。影は音容に落在し、孤明は撐觸を絶す。

寶明頌に云う、思いの清い人はおもんばかることなくして風規が自然にととのう。宝影は声や姿に落ち着き、その孤明には支えはいらぬ。

出家頌、従来出家を求めしも、未だ出家の稱を詳らかにせず。起坐只だ尋常、更に小しの殊勝なる無し。

出家頌、従来出家を求めたが、出家がなによりまだ詳らかでない。起つも坐るもただいつものとおり、少しの殊勝もさらさら無い。

・清思頌参照。

法堂に寄するの頌、東間裏に寂に入り、西間裏に話す。中間裏に睡眠し、通間裏に行道す。向前にしては即ち檢校し、向後しては即ち形を隠す。時人都べて措かず、什摩の精靈そと問う。答えて曰く、淨地上に怒りを鼓し、怡然中に嗔を伴う。平坦處に守らず、危険中に身を感す。盲聾も之に遇えば眼開け、僧瑤は筆を駐めて神を凝らす。

・僧瑤駐筆凝神 佛祖統紀三十七に「梁、武帝……嘗詔張僧繇寫誌眞。誌以指勞破面門、出十二面觀首相、或慈或威。僧繇竟不能寫」とある。祖堂集卷九、九峯道虔の伝に「問、一筆丹青為什摩遊志公眞不得云々」とある。

玄旨頌、去り去るとき標的無く、来り来るとき只摩に来る。人有つて相い借問すれば、語らずして笑うこと咳嗽。

同住の歸寂するに贈るの頌、同住道人七十餘、共に城郭を辞して山居を楽しむ。身は寒木の如くして心芽絶え、唐言を話せず梵書を休む。心期盡くる處身は畏ぶと雖も、如来の弟子なる沙門の様かがみ。深信共に崇たごうして鉢塔成り、巍巍として置きて在り青山の嶂。夫の参道を觀るに虚然ならず、形骸を脱し去りて甚だ高上す。従来今朝の事を説かず、暗裏に頭を埋すめて玄暢を隠す。蹤跡を留めず人間に異る、深妙の神光飽くまで明亮。

・道人七十餘 道人が七十餘人であるとも読めるし、七十余才の道人とも読める。伝灯録三十では歸寂吟きやくごとしているが、それに従えば七十余才ということになるのであろう。

・鉢塔 如来が菩薩だった時に使用した鉢を安置供養する塔。伝灯録三十の元版の注参照。

・深信 深信の人々。

勸學頌に曰く、出家修道は安きを求めること莫れ、念を失して安きを求めば學道難し。未だ得ざれば直に須く大道を求むべし、覺し了れば安きも無く安からざるも無し。

守ることを志して破ることを得たるの頌、十五日已前、師僧は此間を離ること莫れ。十五日已後、師僧は此間こゝに住まること莫れ。去るときは即ち汝が頭を打ちて破し、住まるときも即ち亦た如然かくのこごとくす。去らず住まらず、事意如何ん。是なることは即ち是なるも擬すれば即ち差す。

・是即是擬即差 不去不住事意如何(頭を割られないですますにはどうしたらよいか)という問いに対するあらゆる答を前もって払お

うとするもの。

見聞を辞するの頌に曰く、好く住まれ^{ただ}運ちに分離せん、幽宗は人跡稀なり。従来未だ登陟せず、計として狐疑を遣る無し。

・好住 とどまるものへの別れの挨拶。

・無計遣狐疑 狐疑を遣る手だてが全くない、ということだが、それではなんのことだかわからなくなる。

文明頌、頓に命根を喪して、威徳自ら足り、一物も似ずして、規矩現前す。

古路に遵うの頌、郎中に与う、心を虚しくして境を越え思量を淨す、句裏に蹤無く聲外に詳らかにす。文字の影像駭して驚見せしむ、動容弾指して馨香に飽く。

・淨 きれいさっぱり盡くしてしまふ。

・文字影像云々の句読みにくい。

董兵馬使の与に説示するの偈、宿に心意を静めて山中に到りしは、半偈を求めて神蹤に契わんが為なり。向かつて道うも却って思いて思得ず、却って尋思の碍つることを被りて通ぜず。

まえまえから心意を静めてあなたが山中に來られたのは、半偈を求めて神蹤に契わんとするためでしょう。それなのに云って聞かせても、あれこれ思ひめぐらしてつばをつかみ得ず、尋思にさまたげられて通じないでいる。

・静 淨と通用することがある。

專志頌、宛轉宛轉、疑見を究盡し、只摩に分明にして、無生は戀つることを已む。内外思わざるも、未だ眉面を露わにせず。夢に蛇を踏むが如く、人を驚かして頓に變ず。

學人宗教、宗如に与う、満寺の釈迦子、未だ釈迦の經を詳らかにせず。喚び来たりて試みに共に語れば、口を開きて雑音聲。

三句後意頌、書出でて語に虚多く、虚中に有無を帯ぶ。却つて書前に向いて會して、意中の珠を放却す。

自餘の化縁の終始年月、悉く實録に彰わる。勅して襲燈大師延福の塔と謚す。

經山和尚、瀉山に嗣ぐ。師、諱は鴻譚、未だ實録を觀ず。師、兩浙の尚父たり。大王礼重して師と為し、号法濟大師を賜う。

師、初めて出世せし時、未だ方便を具せずして穩便なることを得ざりき。此れに困りて説法せずして兩年を過ごし得たり。後忽然として心を廻らし、徒弟に向かつて曰く、我れ聞く、湖南の石霜は是れ作家の知識なり、と。我が一百來の少師中、豈に靈利の者無からんや。誰か彼中かしこに去ゆきて勲に彼中の氣道を學び、転じ来たつて密に老漢を救わん。

時に一僧有り、全表と名づく。便ち辞して発して石霜に到る。恰も上堂の日に遇う。便ち問を置きて曰く、三千里外に久しく石霜を響したつ。到来するに什摩と為てか寸歩千里なるや。霜云く、我れ道つ、落帶、手長からず、と。此れより石霜に親近するもの四十餘日、後本山に却歸して和尚を成持せり。便ち来由有りて上堂し説法せり。時に人有りて問う、如何なるか是れ短。師云く、蟻螟眼裏かに著き満たさず。進んで曰く、如何なるか是れ長。師云く、千聖も量る能わず。

全表石霜に却歸して前話を挙似す。石霜微笑して曰く、是れ汝が和尚は眞實の道人なり。全表却つて石霜に問う、如何なるか是れ

短。霜云く、屈曲すること莫し。進んで曰く、如何なるか是れ長。霜云く、雙陸盤中喝彩せず。

全表、此の因縁を持し来たり、師に拳似す。師歡喜して便ち上堂し、衆に告げて曰く、南風吹き来たりて飽くまで鞫底。任たい你横来豎来し、十字縦横なるも也た你を怕れず。時に人有りて問う、与摩に去る底の人、還はた却来する分有りや。師云く、我道う、金鑊も閉ざし得ず。

全表、此の話を持し来たりて石霜に拳似す。石霜當日便ち上堂し、衆に告げて曰く、今日、径山の消息の来る有り。諸上座惣に径山に去ゆけ、径山は是れ眞の善知識なり。具さに前話を拳し、後、却つて衆に向かつて曰く、只だ径山の与摩に道うが如きんば、還た十成なることを得たりや。此くの如しいと雖然も、只だ八分を道い得しのみ。全表便ち出て来たりて問う、与摩に去る底の人、還た却来するの分有りや。云く、金鑊も閉ざし得ざるも、来たりて什摩をかな作さん。

・不得穩便　しっくりといかない。

・氣道　香巖の伝参照。

・寸步千里　石霜の境界の高さを云つたもの。

・落帶手不長　のちの長短の問答のきつかけとなるものであろうが、意味不明。これによってこの一段全体の意味もまた不明となつている。

・成持　卷十四馬祖の伝に出る黃三郎の話し参照。

・来由　卷十長慶の伝に「初參見雪峯、學業辛苦、不多得靈利。雪峯見如是次第、断他云、我与你死馬醫法、你還甘也無。師對云、依師處分。峯云、不用一日三度五度上来、但如山裏燎火底樹種子相似、息却身心遠則十年、中則七年、近則三年、必有来由云々」とある。きつかけ。

・蟪蛄　蚊のまつげに巢喰うといつられる虫の名。

・喝彩　サイコロを使ってのバクチで、勝ち目を出すために気合いをかけること。

石霜久住の道明上座、径山に去かんと欲す。石霜に辞して、發するに臨みし時便ち問う、一毫もて、衆穴を穿つ時如何ん。霜云く、須く万年を得べし。進んで曰く、直に万年を得し後如何ん。霜云く、光靴なることは汝の光靴なるに聽す。白俊なることは汝の白俊なるに聽す。

明上座は此の問を持って径山に來たれり。便ち問うて曰く、一毫もて衆穴を穿つ時如何ん。云く、須く老を得べし。進んで曰く、直に老を得し後如何ん。云く、登科することは汝の登科するに聽す、髓を抜くことは汝の髓を抜くに聽す。

・須得万年 一万年も経たなくてはならない。

・光靴 葛藤語箋に、(伝灯録)鈔、一山曰、光靴、修治完美也。

・白俊 不詳。

靈雲和尚、瀉山に嗣ぐ、福州に在り。師、諱は志勲、福州の人なり。一たび大瀉に造りて其の示教を聞かや、晝夜疲れを亡るること考妣を喪うが如くす。能く喩を為す莫し。偶ま春時に花藥繁花なるを觀て忽然として發悟せり。喜び自ら勝えず乃ち一偈を作りて曰く、三十年来劍客を尋ね、幾たびか花の發し幾たびか枝を抽んずるに逢う。一たび桃の花を見て自従り後、直に如今に至るまで更に疑わず。因りて瀉山和尚に白して、其の悟旨を説けり。瀉山云く、縁より悟達せしは、永く退失すること無し。汝今既に介り、善く自ら護持せよ。遂に錫を甌閩に返す。

玄沙に拳似す。玄沙云く、諦當なることは甚だ諦當なるも敢えて保す、未徹在。僧進んで問う、正に是なり、和尚は還た徹せるや。玄沙云く、須く与摩にして始めて得べし。師云く、古に亘り今に亘る。玄沙云く、甚だ好し。師云く、喏、喏。

玄沙、師に頌を送りて曰く、三十年来只だ常の如きのみ、幾廻か葉を落として毫光を放つ。此れ従り一たび雲霄の外に去り、圓音躰性は法王に應ず。

中塔頌ありて曰く、諦當恒然として古今に亘る、未徹見聞實に甚深。現現に運轉す三十載、春盡きて花を萎まし君が心に示す。師、初めて靈應を創め、後、靈雲に住す。玄徒臻湊せり。

・僧進問正是也 卷十玄沙の伝においては、雲曰正是とあつて、師が云つた言葉となつてゐる。意味は、まさにそうです。つまり徹というような徹ではないということをいう。

長慶初めて参見せしとき問う、如何なるか是れ佛法の大意。師云く、驢使未だ了せざるに馬使到来せり。

・驢使馬使 伝灯録では驢事馬事となつてゐる。ロバ相手の用事が済まないうちに、ウマ相手の用事が到来した。やれやれもつつんざりだ。

雪峯の僧来たりて問う、如何なるか是れ佛出世せし時の事。師、拂子を竖起す。進んで曰く、如何なるか是れ佛未だ出世せざる時の事。師又た拂子を竖起す。其の僧便ち發して雪峯に上る。

雪峯問う、廻ること太だ速きか。其の僧云く、佛法を問うて相い當らず。所以に却歸し來たれり。雲峯云く、你拳し看よ。其の僧便ち前話を拳せり。雪峯云く、你、我に問え、我、你が与に道わん。僧便ち問う、如何なるか是れ佛出世せし時の事、雪峯拂子を竖起す。進んで曰く、如何なるか是れ佛未だ出世せざる時の事。雪峯拂子を放下す。僧便ち礼拝す。雪峯便ち之を打ち、出でよと喝す。

僧、玄沙に拳似す。玄沙云く、譬えば一片の地の如し、契を作りて売りに与つること惣じて了れり。東西四畔並びに你に属し了れり、唯だ中心の一樹有りて由お我に属す。

・僧便礼拝 仏法を問うて相い當つたと思つたのである。

・作契 売買契約書を作ること。

・この問答は伝灯録十六雪峯の伝にあり、割注に「崇壽稠云、為當打伊解處、別有道理」とある。

雪峯、衆に示して云く、山上の鳥、水裏の魚、什摩人が取り得る。僧有りて師に拳似せり。云く、前三三、後三三。雪峯拳するを聞きて、云く、靈雲頂上孤月明らかなり。

・神僧伝八「無著文喜禪師、入五甦山、求見文殊。忽見山翁、(中略)著問、此間佛法如何住持。曰、龍蛇混雜、凡聖同居。曰、衆幾何。曰、前三三、後三三、また祖堂集十二龍廻の伝に「問、古人道、前三三、後三三、意作摩生。師云、西山日出、東山月没」とある。

問う、諸方は盡く皆な雑食す。未審し和尚如何ん。師云く、唯だ閩中の異有り、雄雄として海涯を鎮む。

・雑食 卷一、第二十祖闍夜多尊者の語に「我不一食、亦不雑食」というのがある。また、卷九、九峯の伝に「問、古人有言、眞心妄心、此意如何。師云、是立眞蹟妄。如何是眞心。師云、不雑食云々」とある。

問う、如何なるか是れ西来意。師云く、彩氣夜に常に動くも、精靈日に逢うこと少し。

・彩氣云々 夜ごとちらちらと何か好いことの起こりそつな氣配が動くが、昼になると何も現れない。

問う、久しく沙場に戦つに、什摩と為てか功名就らざる。師云く、君王道有りて三辺静か、何ぞ万里に長城を築くことを勞せん。進んで曰く、干戈を罷息して縮手して歸朝する時如何ん。師云く、慈雲普く潤して辺際無きも、枯樹の花無きを争奈何せん。

・久戦沙場 漢の將軍李廣の故事をふまえる。

・三辺 国境地帯。

問う、混沌未分の時如何ん。師云く、露柱の兒を懐するが如し。進んで曰く、含生し来たりし後如何ん。師云く、一片の雲、大清に點するが如し。進んで曰く、只だ大清の如きは還た點することを受くるや。師云く、与摩ならば含生し来たらじ。進んで曰く、直に純清にして點を絶するを得し時如何ん。師云く、由お是れ眞常流注す。進んで曰く、如何なるか是れ眞常流注。師云く、鏡の常に明らかなるが如し。進んで曰く、未審し、向上に還た事有りや。師曰く、有り。進んで曰く、如何なるか是れ向上の事。師云く、鏡を打破し来たつて相見せよ。

問う、混沌未分の時どうですか。師が云つ、露柱が兒をはらんでいるようなものだ。進んで云つ、兒を生んだあとはどうですか。師が云つ、一片の雲が青空に点するようなものだ。進んで云つ、青空は点することを受けつけますか。師が云つ、受けつけば兒を生むまい。進んで云つ、純清で点を絶したとしていかがですか。師が云つ、それでも眞常流注だ。進んで云つ、どういづのが眞常流注ですか。師が云つ、常に明澄な鏡のようなものだ。進んで云つ、たずねますが、それからさきに事があるのでしょうか。師が云つ、有る。進んで云つ、どういづのがそれからさきの事でしょうか。師が云つ、鏡を打破してから相見しなさい。

・ 一片雲點大清 楞嚴經九「當知虛空生汝心内、猶如片雲點大清裏。況諸世界在虛空耶。汝等一人發眞歸之、此十方空皆悉銷殞。云何空中所有國土而不振裂」。

・ 眞常流注 宝鏡三昧にも見える。眞常は楞嚴經四に「若棄生滅、守於眞常、常光現前」などと見える。

問う、摩尼、衆色に随わず、未審ししづかしな什摩色を作すや。師云く、白色を作す。進んで曰く、這個は是れ衆なり。師云く、玉は本より瑕無し、相如は秦主を誑かせり。

・ 相如 蘭相如。

問う、君王出陣する時如何ん。師云く、呂才は虎耳を葬る。進んで曰く、如何なるか是れ呂才は虎耳を葬る。師云く、坐して白衣

天を見る。進んで曰く、王今何にか在る。師云く、龍顔おしかを触す莫れ。

・呂才 唐高宗の人。詔を受けて陰陽家の書を刪定した。

・葬虎耳 出陣の時のまじないであるらしい。その結果、いながらにして天子がむこうからやって来ることになったのである。

白衣天は原文白衣天。伝灯録によって改める。

王敬初常侍、滄山に嗣ぐ、因みに米和尚の來たるを見て、公は筆を竖起す。米和尚云く、還た虚空を判さき得るや。天官、筆を案上に抛げて便ち宅に入り、更に出でて見ず。米乃ち疑を到せり。

公は襄州延慶寺祖師堂の雙聲の碑文を制せし者是なり。祖教を稱揚して玄猷に洞契し、理は金石の聲を含み、文は風雲の韻を抱く。廣く世に行われたり。

臨濟和尚、黃檗に嗣ぐ、鎮州に在り。師、諱は義玄、姓は刑、曹南の人なり。黃檗の鋒機に契よいて自より乃ち化を河北に闡けり。提綱峻速にして示教幽深なり。其れ樞秘に於いて示誨を陳べ難く、略して少分を申べん。

師、時有つて衆に謂いて云く、山僧、分明に你に向かつて道う、五陰身田、内に無位の眞人有り。堂堂として露現し、毫髮ほく許りの間隔無し。何ぞ識取せざる。

時に僧有りて問う、如何なるか是れ無位の眞人。師便ち之を打ちて云く、無位の眞人はれ什摩の不淨の物ぞ。

雪峯拳するを聞きて云く、林際ただ好手なるに似たり。

師はあるとき衆に向かつて云つた、わしははつきりと諸君に云おう、五陰身田、内に無位の眞人がいる。堂堂とあらわれ、髪一

すじばかりのへだてもない。しっかり見てとってはどつだ。

時にある僧が問う、どのようなのが無位の真人ですか。師は僧を打って云う、無位の真人とはなんといい不浄なものか。

雪峯がその話を聞いて云う、林際和尚はなかなか出来物だ。

・ 什摩不浄之物 什摩はここでは疑問詞ではなく感嘆詞。

師、落浦に問う、従上、一人は棒を行じ、一人は喝を行ずる有り。還た親疎有りや。落浦云く、某甲の見る所の如きんば、两个とも惣に親ならず。師云く、親處作摩生（そもさん）。落浦遂に喝す。師便ち之を打つ。

因みに徳山、僧の参ずるを見て、愛（この）んで趣打す。師委し得て、侍者をして徳山に到らしむ、汝を打たば汝は便ち柱杖を接取し、柱杖を以て打つこと一下せよ、と。

侍者遂に徳山に到り、皆な師指に依れり。徳山便ち丈室に歸れり、侍者却歸して拳似せり。師云く、從來、這個の老漢を疑えり。

徳山は、修行僧が参じて来ると、好んで追いたては棒で打つたが、師はそれを心得て、侍者を徳山に行かせた、徳山和尚がお前さんを打つたら、すぐ柱杖を頂戴して、柱杖で和尚を一つぶつたたきなさい。

侍者は徳山にやって来て、すべて師の指図どおりに行った。すると徳山は丈室に歸つた。侍者は歸つて来て師に拳似した。師は云う、まえまえからこの老漢はくさいとにらんでいた。

因みに僧の侍立する次いで、師、拂子を竖起せり。僧便ち礼拝す。師便ち之を打つ。

後、因みに僧の侍立する次いで、師、拂子を竖起せり。其の僧並びに顧みず。師亦た之を打つ。

雲門代わつて云く、只だ專甲に宜しきのみ。

・只宜專甲 このわたしならちゃんと打たれずにやってみせる。そついうわたしにのみもつてこいの機会であつた。

黄檗和尚、衆に告げて曰く、余が昔時同じく大寂に参ぜし道友、名づけて大愚と曰う。此の人諸方に行脚して法眼明徹なり。今、高安に在り。顧だ群居を好まず、獨り山舎に栖めり。余と相い別れし時、叮囑して云く、他後或いは靈利の者に逢わば、一人を指さして来たりて相い訪わしめよ、と。

時に師、衆に在りて聞き已り、便ち往きて造謁せり。既に其の所に到るや具さに上説を陳ぜり。夜間に至りて大愚前に於いて瑜伽論を説き、唯識を譚じ、復た問難を申べたり。大愚畢夕悄然として對えず、旦の来たるに至るに及び、師に謂いて曰く、老僧獨り山舎に居す。子の遠く来たるを念い且く延いて一宿せしむるに、何が故に夜間、吾が前に於いて羞慙無くも不浄を放ちしや。言い訖るや之を杖すること數下して推出し、門を関却せり。

師、黄檗に廻りて復た上説を陳ぜり。黄檗聞き已つて稽首して曰く、作者、猛火の燃ゆるが如し。子の人に遇いしことを喜ぶ。何ぞ乃ち虚しく往きしや。

師又た去き、復た大愚に見ゆ。大愚曰く、前時は慙愧無し。今日何が故に又た来たるや。言い訖つて便ち棒し、門を推出す。師復た黄檗に返り、啓して和尚に聞すらく、此廻再び返る。是れ空しく歸らず。黄檗曰く、何が故に此くの如きや。師曰く、一棒の下に於いて佛境界に入れり、假使い百劫粉骨碎身し、頂きに擎げて須弥山を遶ること無量百を経るも、此の深恩を報すること、酬い得可き莫し。黄檗聞き已つて、之を喜ぶこと常に異りて曰く、子且く解歇し、更に自ら出身せよ。

師は旬日を過ごして又た黄檗を辞し、大愚の所に至れり。大愚纔かに見て便ち師を棒せんと擬す。師は棒子を接得し則ち便ち抱きて大愚を倒し、乃ち其の背に就いて之を毆すること數拳す。大愚遂に連りに點頭して曰く、吾れ獨り山舎に居し、將に謂えり、空しく一生を過ごすかと、期せざりき、今日却つて一子を得んとは。

先の招慶和尚、拳し終わって乃ち師演侍者に問うて曰く、既に他に因りて得悟せしに、何を以てか却って拳を將て他を打ちしや。侍者曰く、當時の教化は全く佛に因る。今日の威拳は惣に君に属す。

師は此れに因りて大愚に侍奉して十餘年を経たり。大愚遷化に臨みし時、師に囑して云く、子自ら平生に負かざれ。又た乃ち吾が一世を終えしむ。已後、出世して心を傳えんに、第一、黄檗を忘るること莫れ。自後、師は鎮府に於いて匡化せり。黄檗を承けしと雖も常に大愚を讃ぜり。化門に至りては多く喝棒を行ぜり。

黄檗和尚が大衆に告げて云った、わしは昔し、ともに大寂和尚に参じた道友に名は大愚というのがいる。この仁は諸方に行脚し法眼明徹である。今は高安にいる。ただ群居することを好まず、ひとり山舎に住んである。わしと別れぎわにことづけて云うには、のちのちもし靈利の者に逢ったら一人よこしてたずねさせてくれ、と。

その時、師は大衆に在ったが、話を聞くとすぐ出かけて行ってお目どおり願った。そこに到着するとくわしく前の話をのべた。夜になると大愚の前で瑜伽論を説き、唯識を談じ、おまけに問難をしむけた。大愚は畢夕ひっそりとして答えなかった。明け方になると師に向かつて云った、わしはひとり山舎に住んである。あんたが遠くから来たのをおもんばかって、まあとどめて一晚とめてやったのだ。どうして夜のあいだわしの前ではずかしくもなく不浄をたれながしたのだ。そう言いおわると師を杖で数回打ちさえ、追い出して門のかんぬきをかってしまった。

師は黄檗に返って、出来事を話した。黄檗は聞きおわると稽首して云う、作家だ、猛火が燃えるようだ。お前さんが人物に出会って喜ばしい、それなのにどうしてむなしく行ったのだ。

師はまた行ってふたたび大愚に見えた。大愚が云う、このあいだは慙愧無しだ。どうして今日はまた来たのだ。そう云いおわると棒でたたいて門を追い出した。師はふたたび黄檗に返って和尚に申し上げるよう、このたびふたたび返って来ましたのは、ただ粉骨碎身し、頂きにささげて須弥山をめぐって無量市しましょうとも、この深恩に報いることは酬いきれません。黄檗はそれを

聞いて喜ぶこと常にことなつて云つた、お前さんまあ休んで、さらに自分で出身しなさい。

師は句日を過ぐすとまた黄檗に別れを告げて大愚の所へ行つた。大愚は見たとたん師に棒をくらわせようとしたりした。師は棒子を受け取つて大愚を抱きかかえてたおし、その背中をこぶしで数度なぐりつけた。大愚はしきりにうなづいて云つた、わしはひとり山舎に住んで、空しく一生を過ぐすのかと思つていたが、あにはからんや、今日一子を得るとは思わなんだ。

先の招慶和尚がこの話柄をとりあげて師演侍者に問うて云つ、彼によって得悟したのにどうして彼をこぶしで打つたのか。侍者がいふ、そのかみの教化は全く仏により、今日の威拳はまったく君に属する。

師はこの因縁で大愚に侍奉して十余年をすごした。大愚が遷化にのぞんだとき、師にことづけて云つた、お前さん、わしの日頃のねがいにそむいてはならない、またわしの一生が終わつたのち、世に出て心を伝えるとき、決して黄檗和尚を忘れてはならない。その後、師は鎮州府で教化した。黄檗の法を嗣いだけれども常に大愚をたたえた。化門においては多く棒喝を行じた。

・余昔時同參大寂道友名曰大愚 黄檗が大愚とともに馬祖道一に參じたことになっている。

・願不好群居 原文は願不好群居、願では通じないので今改める。

・大愚畢夕悄然 原文悄然は峭然。

・當時教化全因佛今日威拳惣屬君。 當時は出身以前、今日は出身以後、君は臨濟。出身とは悟境に達すること。

時有つて衆に謂つて云く、但だ一切時中、更に間断すること莫れ。触目皆な是なり。何に因りてか會せざる。只だ情生ずれば智隔てられ、想變ずれば體殊なるが為に、所以に三界に輪廻して種種の苦を受く。大徳、心法無形にして十方に通貫す。眼に在つては見ると曰い、耳に在つては聞くと曰い、手に在つては執捉し、脚に在つては運奔す。本と是れ一精明、分かれて六和合と成る。心若し生じざれば隨處に解脱す。

大徳、山僧が見處を得んと欲すれば、報化佛頭を坐断せよ。十地満心も猶お客作兒の如からん。何を以て此くの如きや。盖し三祇

劫空に達せざるが爲めに、所以に此の障り有り。若し是れ真正の道流ならば、盡く此の如くならず。

大徳、山僧略諸人の為に大約して綱宗を話破せり。切に須く自ら看すべし。時光を惜しむ可し。各自に努力せよ。

あの時大衆に向かつて云った、ただ一切時中、決して中断してはならない。そうすれば目にふれるものすべてが是なのだ。どうして解らないかといえは、情が生ずれば智がへだてられ、想が変化すれば身体がことなるがゆえに、三界に輪廻し、種種の苦を受けることになる。

大徳、心法は無形で十方に通貫する。眼に在っては見るといい、耳に在っては聞くといい、手に在ってはとらえ、脚に在ってはこぶ。「本と是れ一精明、分かれて六和合と成る」。心が生じなければ隨處に解脱する。

大徳、このわしの見處を得ようと思つなら、報化化仏の頭を断ち切つてしまえ。十地満心の菩薩も雇い人である。どうしてこののか、つまり三祇劫空に達しないがゆえにこの障りがある。真正の道流ならばことごとくこのようではない。

大徳、わしは少しく諸人のために大約して綱宗を説き明かした。くれぐれも自ら気をつけねばならない。光陰を惜しまねばならない。各自に努力せよ。

・情正智隔想變體殊 新華嚴論卷第一序に「夫以有情之本、依智海以為源、含識之流、總法身而為體。只為情生智隔、想變體殊、達本情亡、知心體合」とあるにもとづく。

・在脚運奔 原文は運を雲とする。

・本是一精明分成六和合 楞嚴經六「六根亦如是、元依一精明、分成六和合、一處成休復、六用皆不成」

自餘の應機對答は廣く別録に彰わす。咸通七年丙戌の歲四月十日示化せり。謚して慧照大師澄虛の塔と号す。

觀和尚、黃檗に嗣ぐ、福州に在り。師、黃檗寺に出家し、密に黃檗の宗教を承けたり。

後、甌閩に復し、丁墓山に於いて小蘭若に居せり。毎に其の戸を扇して、學者の輒ち其の門に造るに由し無かりき。唯だ日に餉食を給する清信の儒流有りて、時に至らば則ち号して之を扣し、乃ち一たび開くのみ。

後因みに雪峯和尚、初めて嶺に入る。久しく高峻を欽ぶ。遂に往きて祇候し、手ずから其の門を扣す。師纔かに門を出ずるや、雪峯一見して欄胸把住して便ち問う、是れ凡か、是れ聖か。師麁面に一唾を与えて云く、者の野狐精。便ち推出却して其の戸を閉ざせり。雪峯云く、只だ老兄を識らんと要せしのみ。

のち甌閩の地に返つて、丁墓山中で小蘭若に住んでいた。常にその戸にかんぬきをかけていたので、修行者には自由にその門に参するすがなかつた。ただ日々食物を給する篤信の儒者が、時分どきになると名を名のつて戸をたたき、やっと一度だけ戸が開くのみであつた。

のち雪峯和尚がはじめて嶺に分け入つたが、久しく師の高峻な家風をしたつていた。そこで行つて御機嫌うかがいしようと思つたからその門をたたいた。師が門を出るやいなや、雪峯は一見して胸ぐらひつつかんで問うた、凡夫か、聖者か。師は眞正面から唾はぎかけて、この野狐精め、と云つてつき出してしまい、その戸にかんぬきをかけた。雪峯が云う、ただお知り合いになりたかつただけなのに。

曹山、洞山に至る。洞山問う、近ごろ什摩の處を離れしや。對えて云く、近ごろ閩中を離れき。洞山云く、什摩の佛法の因縁有りしや。對えて云く、某甲西院に問う、如何なるか是れ大人の相。西院云く、安は三歳(原作蔵)の時は則ち有りき、と。洞山、西院に向かつて合掌して云く、作家。洞山又た云く、某甲行脚せし時、南泉に遇著せり。南泉にも也た這个に似たる因縁有りき。僧有り問う、如何なるか是れ大人の相。南泉答えて曰く、王老师は三歳の時は則ち有りしも如今は無し、と。

洞山又た問う、什摩の處の人なりや。對えて云く、莆田縣の人なり。洞山云く、什摩の處に出家せしや。對えて云く、碎石院。山

云く、碎石院は黄檗に近し、侂は曾つて到りしや。對えて云く、曾つて到りき。洞山云く、什摩の佛法の因縁有りしや。對えて云く、某甲、自ら、如何なるか是れ毗廬の師、法身の主と問うに、云く、我れ若し侂に向かつて道わば則ち別更に有るなり、と。洞山、此の語を聞きて便ち合掌して云く、侂は古佛に見えき。此くの如しと雖然も、只だ一問を欠けり。曹山礼拝して便ち問頭を請う。曹山再三苦切し、問うこと三度にして方めて問頭を得て、嶺に入りて師に参じ、前話を拏せり。進んで問う、什摩の爲の故に道わざるや。師云く、若し我れ道わずと道えば則ち我が口を噤却し、若し我れ道うと道えば則ち我が舌を禿却す。曹山便ち洞山に歸り、具さに前事を陳せり。洞山手を執つて背を撫して云く、汝は甚だ彫啄の分有り。便ち牀を下り、黄檗に向かつて合掌して云く、古佛、古佛。曹山が洞山にやつてくる。洞山が問う、どこからお出でたか。答えて云う、閩中からまいりました。洞山が云う、どんな仏法の因縁があつたか。答えて云う、わたしが西院和尚に問いました、どのようなのが大人の相ですか。西院が云います、わしが三才の時には有つた。洞山は西院に向かつて合掌して云つた、作家だ。

今度は洞山の方から云う、わたしは行脚していた時南泉に出会つたが、南泉にもこれに似た因縁があつた。ある僧が問うた、どのようなのが大人の相ですか。南泉が答えて云う、王老师が三才の時には有つたけれども今は無い。

また洞山が問う、どこで生まれたか。答えて云う、莆田県です。洞山が云う、どこで出家したか。答えて云う、碎石院です。洞山が云う、碎石院は黄檗に近い。お前さん行ったことがあるか。答えて云う、はい。洞山が云う、どんな仏法の因縁があつたか。答えて云う、わたしは自分でどのようなのが毗廬の師、法身の主ですかと問いますと、わしがもしお前さんに云つてやればことさらに有ることになる、と云いました。それはそうだけれども一問を欠いた。曹山は礼拝して問い方を教えてくれるようにたのんだ。曹山は再三ねんごろにたのみ、問うこと三度にしてようやく問い方をおそわり、嶺に入って師に参じて前話を拏した。進んで問う、どうして云わないのですか。師が云う、もしわしが云わないというならばわしの口をおしにする。もしわしが云うというならば、わしの舌をつるつるにすりへらす。曹山は洞山に歸つて具さに出来事をのべた。洞山はその手をとつて背を撫でて云つた、お前さんははなはだきたえがいがあつた。そう云つて牀より下りて、黄檗山に向かつて合掌して云つた、古仏、古仏。

・この黄檗は観和尚を指す。

・古仏 最高の讃め言葉。

師、安和尚に問う、只だ這の一片の田地、合た什摩人を著くに好きや。安和尚云く、个の無相の佛を著くに好し。師云く、早是に汚却せり。

師は安和尚に問うた、この一片の田地だが、誰を居らせたらいいだろつ。安和尚が云う、無相の仏を居らせるにもつてこいだ。師が云う、はやけがしたぞ。

師、住庵せし時、一僧有り、粥を喫しりて便ち師を辞す。師問う、汝は什摩の處にか去く。僧云く、大瀉に礼拝す。師云く、近し那、餅を喫しりて去け。其の僧便ち住まり、餅を喫しりて便ち辞す。師は恰も庵前の樹上に青蛇有りて口を開くを見るを得て、便ち指して云く、汝、若し大瀉に去かんとならば、只だ這の青蛇是なるのみ。

師がむかし住庵していた時、ある僧が粥を済ませて師にいとまをこつた。師が問う、お前さん、どこに行くのだ。僧が云う、大瀉和尚を礼拝しに。師が云う、近いよ、めしを食って行つたらどうだ。その僧はとどまり、飯を済まして別れを告げた。師はちよつと庵前の樹上に青蛇が口を開いているのを見て指さして云つた、お前さん大瀉に行くのなら、あの青蛇こそがそつだばっくりとのみこむかまえ。

自外の樞要一ならず、故らに盡くは彰わさず、乾府五年黄巢の兵馬に遇いて償償して終る。刃に臨みし時、白乳湧きて高きこと數尺、蓋し大權化、跡は測る可き莫し。

陳和尚、黃檗に嗣ぐ、睦州龍興寺に在り。師平生密行を行じ、常に蒲鞋を製造して人に遺れり。此れに困りて陳蒲鞋和尚と称するは是れなり。

・密行 法華經授字人記品第九「羅睺羅密行、唯我能知之。現為我長子、以示諸衆生」。

時有つて衆に謂いて曰く、汝諸人、還^はたこの入處を得たるや。若し未だ入るを得ざれば即ち這裏に向かつて入れ。向後、老僧に辜負することを得ざれ、珍重。

ある時大衆に向かつて云つた、あんたがたは、入處を得ているか。もしまだ入ることができないでいるならここから入れ。あととわしにそむいてはならないぞ、珍重せよ。

・得個人處 悟境に一步ふみこむこと。入處は入頭處ともいう。

師、時有つて云く、明明に你に向かつて道つすら尚お乃ち知らず。豈に況んや蓋覆し將^もち來たるをや。

師はあるとき云つた、あからさまに云つてすらわからない。いわんやつつんでもち出せばなおさらだ。

時に一座主有りて問う、三乘十二分教は某甲粗己に心に留めたり。宗門中の事、乞う提綱せよ。師云く、宗門中の事を問著す、什摩の道い難きことが有らん。恰かも老僧が鼻孔に問著せよ、頭上に漫漫たり、脚下底に漫漫たり、教家は喚んで什摩とか作す。座主「云く」、教家には這个の意旨無し。師便ち之を打つ。

あるとき一人の座主が問うた。三乘十二分教は、わたくしほぼ心にとめております。宗門中の事についてどうか要のところをお示し下さい。師が云つ、宗門中の事をたずねておるが、なんのむつかしいことがあるつか、ずばりわしの鼻孔にたずねてみよ。頭上に漫漫、足下に漫漫だ。教家では何んと呼んでおるのだ。座主が云つ、教家にはその意味のものはありません。師は座主を打つ。

・ 恰問著老僧鼻孔 恰が恰似だと通りがよい。しかし語録においてもそうっていない。

・ 漫漫 無限定の広がりを示す。

師問つ、大徳、什摩の經論を講ずるや。答えて曰く、十本の經論を講ず。作摩生そもんが講ず。云く、文に依りて講ず。你是經を講ずること解あわす。某甲は則ち講ずること解あわす。請あう師講ぜよ。云く、你是是れ教を聴くの人ならず。某甲會せず。乞あう師、教を説け。云く、三段同じからず、今は第一に当たる。

師が問つ、大徳、なんの經論を講じておるか。答えて云う、十本の經論を講じております。どうか講じておるか。文の通りに講じております。お前さんには經を講ずることはできない。わたくしは講ずることができません。どうか師が講じてください。師が云う、お前さんは經を聴く人ではない。わたくしにはわかりません。どうか教を説いてください。師が云う、三段同じくない、今は第一段に当たっている。

・ 三段不同今當第一段 睦州の語録に「問、不涉廉纖 請師道。師云、三段不同、今當第一、向下文長、赴在來日」、また「問、請師講經。師云、買帽相頭。進云、謝師慈悲。師云、拈頭作尾、拈尾作頭、還我第三段來」。

又た問う、大徳、什摩の經論を講ずるや。云く、曾つて十数本の經論を講ぜり。何ぞ妄説することを得たる。對えて云く、某甲實語せり。師云く、雪上更に霜を加う。枷を擔つて状を過あこし來たれ、我れ你のため与に道わん。妄語せじ、近前來。便ち近前す。師云く、与摩に黙することを得たり。大徳、三月を隔てし後便ち悟れり。

また問う、あなたはなんの經論を講じられるか。云う、十数本の經論を講じました。よくもまあうそが云えたものだ。答えて云う、ほんとうですよ。師が云う、雪の上に霜を加えた。首枷をつけて自白状をもってこい。わしがお前さんに云つてやろう、うそは云わないよ、近くにおいて。大徳は近づくと。師が云う、よくもそんなに黙あつていられる。大徳は三月経つて悟つた。

又た問う、什摩の處よりかきたる。云く、江西より来たる。夏は什摩の處にか在りし。云く、雲居、雲居切要の處作摩生。云く、只今作摩生。「師云く」、上大人を拈ず。對えて云く、什摩の罪過有りや。師云く、雲居与摩に道いしや、是れ你与摩に道いしや。云く、雲居与摩に道いき。師云く、三家村裏の老婆禪、主と造ること得ず、自ら領して出で去れ。

また問う、どこから来たか。云う、江西から来ました。夏はどこですこしたか。云う、雲居です。雲居は切要のところはどうか。云う、「今どうだ」ということです。師が云う、上大人をひねくつておる。答えて云う、どこがわるいのですか。師が云う、雲居がそう云ったのか、お前が自分でそう云ったのか。云う、雲居がそう云ったのです。師が云う、片いなかの老婆禪、主人公となり得ない、自分をしょっぴいて行け。

・拈上大人 拈の字に疑惑が残る。上大人は語録に「問、如何是一代時教。師云、上大人丘乙己」とあるに同じ。通俗編七によれば、筆畫の簡単な字をえらんで子供の手習いの便としたもので、意味はないとのことである。

師、僧の上来するを見て云く、破せり。什摩の處か是れ破處なる。師云く、破せり。

臨済は僧の上来するを見て便ち喝す。僧有りて問う、古人は纔かに人を見るや便ち喝せり、意作摩生。師は僧正と喚ぶ。僧止應諾す。師云く、什摩の共に語る處か有る。又た云く、来来、會するや。對えて云く、會せず。會せざれば則ち念經持齋せよ。

臨済は僧がやって来るのを見るや否や喝した。ある僧が問う、古人は人を見るや否や喝しております。どういふつもりでしょう。師は僧正と呼ぶ。僧正はいとこたえる。師が云う、(名を呼ばはいとこたえる)そこにどんな問答をさしはさむ必要があるか。また云う、さあさあわかるか。答えて云う、わかりません。わからなければ念經持齋せよ。

又た僧に問う、什摩いずれの處よりか来たる。云く、臺山に遊び去り来たれり。還はた文殊まじに見えしや。云く、見えたり。什摩の處にか見えし。答えて云く、臺閣上に見えたり。師云く、泥堆を見たり。又た云く、近前せよ、汝、文殊を識るや。云く、識らず。師が云う、年高くして臆長け、上座頭を占め得たるに、並びに氣息無し。

また僧に問う、どこから来たか。云う、五台山に行つて来ました。文殊さんのお目にかかったか。云く、はい。どここのところでお目にかかったか。台閣の上でお目にかかりました。師が云う、泥のかたまりを見たんだ。また云う、近く来い、お前さん文殊がわかるか。云う、いいえ。師が云う、いい年をして上座の位まで占めとるのに、死人同然だ。

・氣息 卷四薬山の伝に「此沙弥有妙子氣息」。

問う、祖意と教意と還た同じきか別なるか。師云く、教意は是れ教意、祖意は是れ祖意。

問う、如何なるか是れ學人の自己。師云く、一つには汝が問わざることを恐れ、二つには汝の會せざることを恐る。便ち請う。師云く、心の人に負かざれば、面に慚愧無し。

・心不負人面慚愧 睦州語録ではしきりに使われている。心に疚しさがなければ、顔に恥じる色は出ないはずだ。

大随和尚、安和尚に嗣ぐ、師、諱は法眞、俗姓は陳、東川の人なり。心行慈悲にして道德高峻たり。飢つるを賑し、儉なるを呵し、己れを人に割く。而も天性林巒に敖び、道を守つて浮世に趣かず。大蜀皇定、其の徳の高きを響したい、勅書もて請詔し召す。師は老病を辞して赴かず。渥澤、紫衣と法號神照大師とを須送す。

僧に問う、什摩いすれの處にか去ゆく。對えて云く、娥媚ごめいに去きて普賢を礼拝す。師は佛子を提起して云く、文殊、普賢、惣に這裏に在り。其の僧便ち圓相を作りて背後に抛向せり。師、侍者を喚んで云く、一貼の茶を將もち來たりて師僧に与えよ。

僧に問う、どこに行くか。答えて云う、娥媚山に普賢さんをおがみに参ります。師は松子をとりあげて云う、文殊さんも普賢さんもみなここに居る。その僧は円相を造つて背後にポイとはおりすてた。師は侍者を呼んで云う、茶を一ぶくいれてこの坊さんにさしあげる。

・師喚侍者云 原文では云の字の上に師の字がある。

師、順世せんと欲せし時、口喁を患いき。師乃ち衆を集め、上堂して告げて云く、還はた人の吾が口を醫し得る有りや。人の醫し得る有らば出で來たれ。再三徴せしも人の祇對する無し。師云く、若し人の解よく醫する無くんば、老僧自ら醫せん。遂に手を以て推し正して寂を告げたり。

師は順世しようとしたとき、口のまがる病氣にかかった。そこで師は大眾を集めて上堂し、告げて云った、誰かわしの口をなおしてくれないか。なおし得るものが居れば出で来てくれ。このように再三もためたけれども応ずるものはなかった。師が云う、もしなおせるものが居なければ、わしは自分でなおそう。そう云うて手で口のゆがみを正して寂を告げた。

靈樹和尚、西院安禪師に嗣ぐ、韶州に在り。師、諱は如敏、冥州の人なり。四十餘年より大いに漢國を化す。其の道行狐峻、一方の賢儒、敬重すること極まれり。異行有ること多し。南朝礼して師と為し、号知聖大師を賜えり。

僧有り問う、和尚生縁什摩の處にか在る。云く、日の東方に出で、月の西山に落つ。年は多少ぞ。師云く、今日生まれ、明日死す。ある僧が問う、和尚さんのお生まれはどちらですか。云う、日が東に出、月が西の山に沈む。おいくつですか。師が云う、今日

生まれ、明日死ぬ。

・ 生縁在什摩處 如何是三世諸佛出身處という問いを下敷きしている。

問う、如何なるか是れ法身。云く、鼓鳴れり、喫飯し去らん。

問う、どういふのが法身ですか。云う、太鼓が鳴った、めし喰いに行こう。

・ 卷十四百丈の伝に「有一日普請次、有一僧忽聞鼓聲、失聲大笑、便歸寺。師曰、俊也、俊也。此是觀音入理之門。師問其僧、適來見什摩道理、即便大笑。僧對曰、某甲適來聞鼓聲動、得歸喫飯、所以大笑。師便休」。

問う、佛法畢竟の事如何ん。師、両手を展開す。

鎮州大王、趙州と師とを齋に請う次いで、師、趙州に問う、大王は和尚を齋に請えり。和尚何を將つてか報答せん。趙州云く、念佛す。師云く、門前の乞兒すら也また与摩に道つことを解よくす。州云く、大王よ錢を將ち來たつて靈樹に与えよ。

鎮州大王が趙州とを齋に招待したとき、師が趙州に問う、大王が和尚さんを齋に招待した。和尚さんは何で報いられるか。趙州が云う、念仏する。師が云う、門前の乞食だつてそんなことを言うことはできませんよ。趙州が云う、大王どの、靈樹に一錢めぐまねよ。

・ 卷十八趙州の伝に「問、如何得報國王恩。師云、念佛。僧云、街頭貧兒也念佛。師拈一个錢屿」

嶮山和尚、西院禪師に嗣ぐ、饒州に在り、未だ行録を觀ず、化縁の終始を決せず。

問う、如何なるか是れ西来意。云く、中冬嚴寒。

・中冬嚴寒 時候の挨拶語。

問う、如何なるか是れ深深の處。師云く、汝が舌頭の地に落つるを待ちて則ち汝に向かつて道わん。

問う、どういふのが深深的處でしょう。師が云う、お前さんの舌が地に落ちたら云うてやろ。

道吾休和尚、關南に嗣ぐ、毎日上堂して、蓮花の笠子を戴き、身に欄簡を著て鼓を撃ち笛を吹き、口に魯三郎と稱えて云く、關南の鼓を打動し、盡く徳山の歌を唱えん、と。法樂自ら娛しむ者は是れなり。

・戴蓮花笠子、身著欄簡 欄簡がはつきりしないが、シャーマンの扮装を示している。

・魯三郎 歌曲の節の名稱であるらしい。

・打動關南鼓 伝灯録卷十襄州關南道常禪師の伝に、「師每見僧來參禮、多以拄杖打趁。或云、打動關南鼓。而時輩鮮有唱和者」。

徳山の歌については何を指すのかはつきりしない。

人有つて拈じて東山に問う、古人言つ有り、關南の鼓を打動し、盡く徳山の歌を唱えん、と。如何なるか是れ關南の鼓。云く、聴け。如何なるか是れ徳山の歌。云く、還た解く和し得るや。忽し同道の者に遇わば作摩生。云く、他をして舞いを作して、聲に應ぜしめよ。便ち舞いを作す時作摩生。云く、知音の者無からざるも、亦た須く諱却すべし。諱却せし後如何ん。云く、萎萎羸羸、且く与摩に時を過す。

ある人がこの話をとりあげて東山に問うた、古人が云つております。關南の太鼓を打ち鳴らし、徳山の歌ばかりをつたおうと、どのようなのが關南の太鼓でしょうか。云う、聴け。どのようなのが徳山の歌でしょうか。云う、和することができるか。もし同

道のものに出会つたらどうしましょう。やつこさんに舞を舞わせて、歌にあわさせる。舞いはじめたときはどうしましょう。云つ、知音の者は無いでもないけれども忌避せねばならない。忌避したあとどうでしょう。云つ、ぐんなりぐつたりと、まあそんな風な時を過す。

師、僧堂に入り、第一座に問う、上座は是れ什摩人なりや。對えて云く、東國の人なり。彼中かしこに還た這個様の人有りや。對えて云く、有り。既に有るに、這裏に來たりて什摩をか作す。對えて云く、只だ有るが為に、所以に回避し來たれるに、今日恰も遇著せり。師便ち呵呵大笑して房丈に却歸せり。

師は僧堂に入つて第一座に問うた、上座はなに人だ。答えて云う、東國の人間です。あそこにこの様な人物は居るか。答えて云う、居ります。すでに居るのに、ここに來て何をしようというのか。答えて云う、居るからこそ逃げて來たのに、今日ずばり出會いました。師は呵呵大笑して方丈に歸つた。

俱胝和尚、天龍に嗣ぐ、敬安州に在り。未だ行録を觀ず、始終を決せず。

・敬安州 伝灯録には婺州金華山俱胝和尚と出ている。敬安は婺の字の分離したものが。

師因みに住庵の時、尼衆の實際と名づくる有り。笠子を戴き、錫を執つて師を遶ること三市し、錫を卓てて前に立ち、師に問うて曰く、和尚若し答つれば某甲は則ち笠子を下ろさん。師無對。其の尼便ち發し去る。師云く、日勢已に晚し、且く止まりて一宿せよ。尼云く、若し答え得れば則ち宿せん。若し答え得ざれば則ち進前して行かん。師歎じて曰く、我は是れ沙門なるに尼衆の笑う所を被れり。濫りに丈夫の形に處りて而も丈夫の用無し。山を出でて知識を參尋せんと欲す。宴座の中忽然として神人の報じて言く、三五日の間にして大菩薩人有りて到り來たり和尚の為に說法せん、と。未だ旬日を逾えざるに天龍和尚到り來たる。師接足して前み迎え、

侍立するの次いで、具さに上事を陳ぜり。未審いぶかし如何かれに他に對えん。天龍一指を豎起せり。師當時に大悟せり。後來衆の為に云く、某甲は天龍和尚一指頭の禪を得て、一生用い盡さず。

師が庵住いをしていた時、實際という尼さんがあって、笠をかぶり、錫杖を手に師のまわりを三遍まわって錫杖を立て、前に立って師に問うて云った、和尚さまもお答えになれば、わたくしは笠を脱ぎましよう。師は無對。その尼さんは発とうとした。師が云う、日もすでにおそくなりました。まあ一晩とまって行きなさい。尼さんが云う、もしお答えになればとまりましよう、もしお答えになれば前にすすみます。師は歎いて云った、わたしは沙門でありながら尼さんに笑われてしまった。みだりに丈夫の姿をとりながら丈夫のはたらきがないとは。山を出て善知識を参尋しようとした。坐禅をしている時ひよいと神人が知らせて云った、三五日のあいだに大菩薩人がやって来て、和尚に法を説きますよ。十日を過ぎないうちに天龍和尚がやって来た。師は足をいただいてすすみ迎え、侍立したとき、具さに前の出来事を述べたあとたずねた、あのお、どう尼さんに答えたらよいのでしょうか。天龍和尚は一指を立てた。師はたちどころに大悟した。のち大衆に向かつて云った、わしは天龍和尚の一指頭の禪を得て、一生使っても使いきれない。

・宴坐之中 原本坐の字

・無門関第三則参照。

勝光和尚、紫湖に嗣ぐ、台州に在り。

問う、如何なるか是れ和尚の家風。云く、福州の楫枝、泉州の荆桐。

問う、如何なるか是れ佛法の両字。云く、即便に道わん。進んで曰く、請う師道え。云く、穿耳の胡僧笑つて點頭す。

問う、どういふのが仏法といふことですか。云う、すぐ言おう。進んで云う、どうぞおっしゃって下さい。云う、耳かざりつけた胡僧が笑つてつなずいている。

・穿耳胡僧 達磨

資福和尚、仰山和尚に嗣ぐ、吉州に在り。師諱は貞邃、韶州須昌縣の人なり。

師、時有つて團子を把つて面前に向かつて云く、諸佛菩薩及び入理の聖人は皆な這裏より出づ。却つて折破して抛下し、胸を拍開して云く、作摩生。

・伝灯録十二吉州資福如實禪師の伝に似た話がある。そこでは團子は蒲團となっている。つまり坐禅用の蒲団をいふのである。

・折破抛下 千聖をも慕わず。

・拍開胸 己靈をもち出したところ。

問う、如何なるか是れ古佛心。云く、山河大地。

問う、如何なるか是れ納僧切急の處。云く、此に過ぎず。

問う、室内に喪を呈する時如何ん。師云く、好个の問頭。學人礼拝す。師云く、苦痛、蒼天。學人云く、此の時學人和尚を重捺するは如何ん。云く、明日来たれ、徐に向かつて道わん。學人云く、苦痛、蒼天。師便ち之を打つ。

問う、室内で喪を発するときどうですか。師が云う、いい質問だ。学人は礼拝する。師が云う、やれ苦しや、やれ悲しや。学人云く……どうですか。云う、明日来い。云うてやるう。学人が云う、やれ苦しや、やれ悲しや。師はこれを打つ。

・蒼天 死者を悼む言葉。

・學人重探 意味不明。

問う、古人拈搥豎拂す、此の理如何ん。噯。

問う、古人は搥をとりあげたり、扠子を立てたりしております。どういふ道理があるのでしょうか。噯。

・噯 感歎詞。あつ、おつ。

又た僧、夏を過ぎて師に問う、某甲新たに藜林に入る。此間すかんに在りて夏を過ぎすも、未だ曾つて和尚の指教を蒙らざりき。亦た須らく往きて問うべし。遂に和尚の所に到りて其の意を述べ、則ち師の攔胸して托出するを被れり。云く、某甲は此の山に住してより、未だ曾つて一箇の師僧の眼をも瞎却せず。

・又僧過夏問師 これは臨濟録におけるように、師にではなく第一座かなにかに問うたのでなければ後の話しが続かない。

・亦須往問 これは第一座に当たる人の答えであろう。

問う、如何なるか是れ一路涅槃の門。師彈指一下し、却つて手を展ぶ。如何にか領會せん。云く、是れ秋月明らかならざるにあらず。子自ら八九に横行するのみ。

・横行八九 よくわからない。

祖堂集卷十九

